２０２４年４月１３日（土曜日）　11：00～　　於：京都ブライトンホテル

勝目やすしを育てる会　総会　報告

1. 講演会では、東京大学医学部付属病院放射線科　総合放射線腫瘍学講座特任教授　中川恵一先生により、先生自らの経験を交えながら「大人のがん講座」というタイトルで講演が行われました。

内容は、

日本は世界で最もがんの多い国である。男性の６５．５％、女性の５１．２％が罹患し、働く世代、つまり６０歳までの死因の１／２はがんである。

がんは台風や自然災害とは違い、大半が制御可能な病気・備えることができる病気であり、早期に見つけることができれば９割以上が治る病気である。

今の中高教育では保健体育でがんについて教育されているが、大人世代は教育を受けていない。従って、大人ががんを知る必要がある。

超少子高齢社会では、がんで死なずに１００年生きるために、がんにならないためにどうすれば良いか、もし罹患した場合の仕事とがん治療の両立を考えなければならない。

がん全体の１０年生存率は６０％、早期がんであれば９０％が治る。不治の病ではないが、がんと診断されると自殺率が２０倍上昇する。

遺伝が関係するがんは５％である。多くのがんは老化によるものである。

遺伝子の経年劣化と免疫力の低下ががんの発症リスクを高める。

タバコやウイルス、ピロリ菌、放射線などは老化に加え臓器の遺伝子を傷つけ、免疫を下げる原因になる。

６０歳で１日あたり約５０００個のがん細胞ができていると言われるが、免疫機能ががんの発症を抑えている。

免疫機能が取り逃がした１個のがん細胞がクローン増殖しがん化する。

１㎝のサイズになるのに１０～２０年かかる。そこから２㎝のサイズになるのに１～２年である。

早期がんと言われるのは２㎝まで。つまり発見可能ながんは１～２㎝までである。

多くの早期がんは症状がないため、無症状でも検査することが重要である。

男性は高齢化するに従って罹患率が上昇するが、女性は老化に加え２０～４０歳代で子宮頸がんの、４０歳代後半で乳がんの罹患率が上昇する。

定年延長と女性の就労率上昇により、がんは働く人の病気になった。

総就労人口のうち６５歳以上が占める割合は、日本は１３．５％、ドイツ２％、フランス１％である。

６５歳でのがん罹患率は１５％のため、日本では定年までに７人に１人はがんになる。仮に７５歳まで働くとすると男性は３人に１人、女性は４人に１人がんになる。

日本のがん治療は素晴らしいが、国民のリテラシーは低い。

教育をされてこなかったため、定期的ながん検診受診率は先進国のなかで最低であり、ワクチンの摂取率も低い。

大人のがん教育が重要な課題であり、ワクチン接種やがん検診受診率を上げていく必要がある。

がんリテラシーを向上させるため大人のがん教育はとても重要だと感じました。

※中川恵一先生は日経新聞に連載をされている他、がんに関する正しい知識と最新情報を伝えるためYouTubeの講座を配信されています。